

図1 山下町13番館

開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日/平成元年6月14日
印刷/有三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第010083号 類別・分類B-BE160

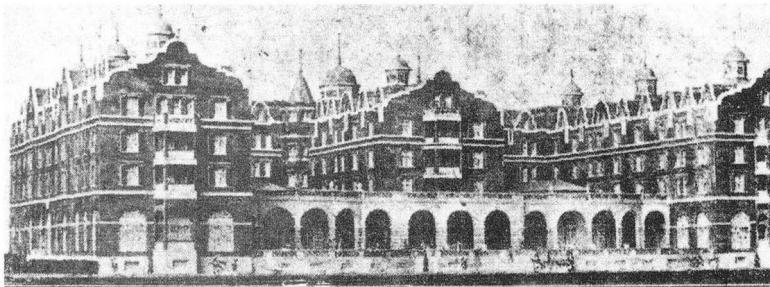


図2 グランド・ホテル

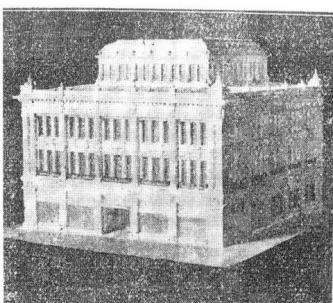


図3 吉田橋鶴屋呉服店模型

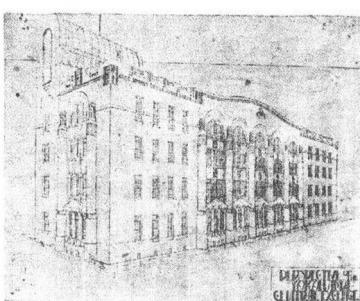


図4 横浜中央電話局

今回の展示中、「横浜博覧図」に採りあげることのできなかつた「未完の建築」四題を紹介します。
①グランドホテル
明治四一年四月に発表された全面改築案(図2)
【横浜貿易新報】

同年四月二四日)。E型平面で、バンドに三つのゲーブルをみせ、一〇の塔をのせた華やかなもの。英國の建築家ローヴェル(Lowell, R. coulburn)の設計。バンドの偉觀となるべき案であつたが実現には至らなかつた。

②山下町一三番館

明治四二年一二月二八日焼失したオッペンハイマー商会の再建案(図1)「東京勧業展覽会出品建築圖案集」。同館に設計事務所を置いていたチエコ人建築家ヤン・レツル(Leitzel, Jan)の作。ウィーン・セセッションを反映させたフアサーード(正面)は、グランドホテルとともにバンドの景観を一新させたに違ひない。

③吉田橋鶴屋呉服店

元萬竹亭跡地に計画されたデパート

横浜 未完の建築四題

同年四月二四日)。E型平面で、バンドに三つのゲーブルをみせ、一〇の塔をのせた華やかなもの。英

国建築(図3)「神奈川県案内誌」。清水組の名デザイナー田辺淳吉と、美校出身の和田順頃が設計にあたっている。完成間際の大正三年一月四日失火のために全焼されることはなかつた。

④横浜中央電話局

現中区日本大通一二番地NTT横浜情報案内センター所在地に建設され、軸体が打ちおわつて全容をみせはじめた時に関東大震災に遭つた。バラボラのアーチ、軒部のレリーフ、柱上部の照明器具(?)といった新機軸が目をひく(図4)【横浜貿易新報】大正一二年二月二十五日)。設計は遞信省臨時電信電話建設局技師で、分離派建築会の面々と東京帝大同期卒の森泰治と伝えられる。震災後このデザインが放棄されたことは横浜のみならず日本の近代建築史にとっても残念なことであつた。(良)

日下工事中の横浜中央電話局とその設計図

「横浜博覧図」展に寄せて

都市形成と 横浜・中国の居留地建築

横浜開港資料館では、六月十四日から「関東大震災前 横浜博覧図 関内の街と建物」という展示を計画しています。そこで本日は、中国も含めた開港場建築の比較調査をされている東京大学生産技術研究所の藤森照信先生に、開港場を持つた都市における建築・都市形成に関する話を中心として、伺いました。また、藤森先生の研究室に留学中の中国留学生講師の張復合先生にも話合いに加わっていただきました。なお通訳は、台南成功大学出身で藤森研究室の博士課程に在籍している黄俊銘さんにお願いしました。

——藤森さんと私で最初に横浜に来たのは、昭和四九年でしたね。当時は、この横浜開港資料館もまだなく、閑散とした感じを受けたことを覚えてますが、藤森さんの印象はいかがだったでしょうか。

藤森 建築史の対象として横浜の街を見たのは、その時が初めてでした。その頃、東京にいてなんとなく知っている建築などと、開港記念会館、赤レンガ倉庫、ホテルニューグランド、県立博物館ぐらいで、全体的に寂しい印象を受けました。

それと、こういうバンド沿いの洋館の遺産というものに、当時はまだ注目する人もなく、遠藤於菟

——藤森さんと私は、當時横浜だけでなく、神戸・長崎などの居留地の建物を調査されていましたが、それらと横浜の印象の違いをお聞かせください。

藤森 まず共通した印象というと、

——藤森さんは、當時横浜だけではなく、神戸・長崎などの居留地の建物を調査されていましたが、それらと横浜の印象の違いをお聞かせください。

張 今回が三回目です。

——張さんは、藤森さんと天津、青島などの中国の租界、日本でい

う居留地の建築を調査されていますか。

張 その通りですが、上海と横浜はやはり違います。横浜はむしろ青島に似ていると言えます。青島は海に向かって公園があり、公園のそばに外国人が造った西洋建築があります。

——それは、山手の印象によるものでどうか。そういえば上海には山手のような所はありませんね。

張 そうです。藤森さんがうちでしていますね。

藤森 中國でバンドがあつて、ブ

ラフ(山手)があるところは青島

と、香港ですが、青島は一九〇〇

いう景色ですが、あれには感動しました。日本の幕末の居留地にしかない景観です。それと海岸通りすぐそばに山手という豊かな環境の住宅街があるというの、四つの開港場独特的の珍しい感じを受けていました。四つの居留地を見て一番大きかったのは、その都市がもつている建築や都市の遺産が時代ごとに大分変わっているということです。例えば長崎では、幕末から明治初期の居留地の初期の姿がよく残っています。その次の時期が遺っているのが神戸、そして明治中期ぐらいから大正初めの頃までちよつと遅れて遺っているのが函館です。横浜は居留地時代の遺産は何もなく、関東大震災以降のものが遺っているという感じです。各居留地に少しずつ時代の相がずれて遺っている感じで、全部並べて見て、はじめて居留地全体がわかると言えます。

——張さんは、横浜へは何回いらっしゃりますか。

張 今回が三回目です。

——張さんは、藤森さんと天津、

横浜の最大の遺産は日本大通りと、横浜公園だと思いますが、それからすると、横浜はイギリス系と言えそうです。

——イタリア系というのはどこですか。

藤森 天津です。天津は、フランスとイタリアが拮抗しています。

横浜公園だと思いますが、それからすると、横浜はイギリス系と言えそうです。

——都市形成の考え方における各

国との違いの話が出ましたが、最近

日本の居留地建築の移入過程における西回り、東回り論というのを

藤森さんがうちでしていますね。

藤森 居留地建築における西回り、

東回り論というのは、最先端の話

で、ここ三年ほどの間にでてきま

した。規模も大きく横浜とは比較できないかもしませんが、共通する性格としてあげられるのは、違うのは、一つの居留地がフランス人居留地、西側が日本人街となつていて、上海も内外人が分けられていますね。

——上海が横浜ともう一つ大きく

違るのは、一つの居留地がフランス租界、イギリス租界というよう

に分かれていますね。それは印象

の違いに結びつかせんか。

藤森 日本の場合どの居留地も、ある一国が指導して居留地を形成したのではなく、連合体でやつてあります。ところが中国の場合はつきりしていて、香港と上海はイギリス、青島がドイツ、天津がフランスといったらいいです。そして、各国のその時代の都市形成的の考え方をそのまま持ち込んでいます。

特徴をあげると、イギリスは公園を造り、フランスは街中に通りをとおし正面に教会を建て、イタリアは広場を造るのです。

——イタリア系というのはどこですか。

藤森 天津です。天津は、フラン

スとイタリアが拮抗しています。

横浜公園だと思いますが、それからすると、横浜はイギリス系と言えそうです。

——都市形成の考え方における各

国との違いの話が出ましたが、最近

日本の居留地建築の移入過程における西回り、東回り論というのを

藤森さんがうちでしていますね。

藤森 居留地建築における西回り、

東回り論というのは、最先端の話

で、ここ三年ほどの間にでてきま

うかになつてないところで、なんとなく遅れた、きたない感じだなと思いました。

藤森 建築史の対象として横浜の街を見たのは、その時が初めてでした。その頃、東京にいてなんとなく知っている建築などと、開港記念会館、赤レンガ倉庫、ホテルニューグランド、県立博物館ぐらいで、印象はいかがだったのでしょうか。

藤森 建築史の対象として横浜の街を見たのは、その時が初めてでした。その頃、東京にいてなんとなく知っている建築などと、開港記念会館、赤レンガ倉庫、ホテルニューグランド、県立博物館ぐらいで、印象はいかがだったのでしょうか。

藤森 建築史の対象として横浜の街を見たのは、その時が初めてでした。

その頃、東京にいてなんとなく

知っている建築などと、開港記

念会館、赤レンガ倉庫、ホテルニュ

ー、グランド、県立博物館ぐらいで、

全体的に寂しい印象を受けました。

それと、こういうバンド沿いの

洋館の遺産というものに、当時は

まだ注目する人もなく、遠藤於菟

という建築家の仕事についても明

らかになつてないところで、なんと

なく遅れた、きたない感じだなと

思いました。

藤森 建築史の対象として横浜の街を見たのは、その時が初めてでした。

その頃、東京にいてなんとなく

知っている建築などと、開港記

念会館、赤レンガ倉庫、ホテルニュ

ー、グランド、県立博物館ぐらいで、

全体的に寂しい印象を受けました。

それと、こういうバンド沿いの

洋館の遺産というものに、当時は

まだ注目する人もなく、遠藤於菟

という建築家の仕事についても明

らかになつてないところで、なんと

なく遅れた、きたない感じだなと

思いました。

藤森 建築史の対象として横浜の街を見たのは、その時が初めてでした。

その頃、東京にいてなんとなく

知っている建築などと、開港記

念会館、赤レンガ倉庫、ホテルニュ

ー、グランド、県立博物館ぐらいで、

全体的に寂しい印象を受けました。

それと、こういうバンド沿いの

洋館の遺産というものに、当時は

まだ注目する人もなく、遠藤於菟

という建築家の仕事についても明

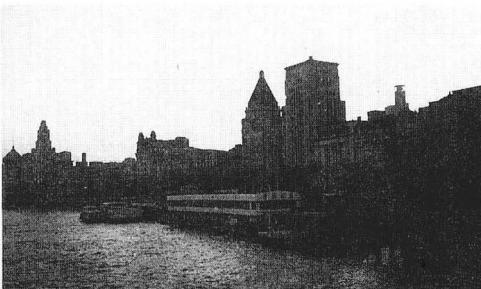
らかになつてないところで、なんと

なく遅れた、きたない感じだなと

思いました。

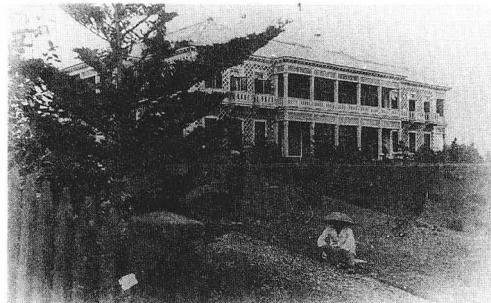


藤森照信氏



現在の上海バンド

した。東アジアの居留地建築の伝来は、インド洋、東南アジアを経て中国を経由してくるという東回りと、大西洋を渡つてアメリカに入り、アメリカ大陸が開拓され、太平洋を渡つてくる西回りがあります。両者の性格はまったく異なっているのです。東回りはインドという熱帯をこえてくるので、いかに暑さから身を守るかということに建築の力点が置かれています。その結果、ベランダを生み出すのです。東南アジアから中国にかけての西洋館全てが、レンガ造りでベランダを付けるというスタイルになっています。日本についても、初期のものは長崎、神戸では明治時代いっぱいベランダスタイルが踏襲されるのですが、横浜では様相が違ってきます。グランドホテルなどにはベランダが付いていません。



ブリッジンス設計のイギリス公使館

南北の数がいます。カーペンター、ビルダーを職業としている人を人名録から拾いだすと継続的にかなりの人がいます。それらの人が居留地の建築家を施工面で支えたのでしょう。

木骨石造という方式を考えたのです。木の骨組みを造り、周りに石を貼り巡らすという擬似的な防災の方式を採用しました。ブリッジンスは、イギリス公使館

は、木骨石造という方式を考へたのです。特に横浜では慶應二年に豚屋火事と呼ばれる大火が起き、街がまる焼けになるという経験をしていました。そこでブリッジンスは、木骨石造という方式を考へたのです。木の骨組みを造り、周りに石を貼り巡らすという擬似的な防災の方式を採用しました。

木骨の外に瓦を貼り目地を塗込めるという、なまこ壁の方式を

横浜にふさわしいものとして、ま

ず採用しました。そしてもう少し

発達したものが旧横浜駅や、町会所の木骨石造だと考へると横浜の特徴がわかるのではないかと最近考へています。

——四つの居留地のなかでの横浜の特徴といえるのは、大きな中華街の存在ではないかと思いますが。

藤森

そう、他の居留地にも中華街的なものがあつたのですが皆なくなってしまっています。神戸は後に作られたものですし、本当に中華街が遺つたのは横浜だけ、当然そこには中国人が編み出した都市の伝統とか建物の作り方があつたはずだが、中華街が周りに与えた影響というのはあまり聞きませんね。料理以外には。

横浜の建築に大きな足跡を遺したブリッジンスは、アメリカ人として、ここに居留地建築の西回り論といふのが言われるのです。アメリカ大陸を開拓してきた建築というのは板を張り、ベンキを塗るという下見板張りという形式をとります。これはアーリーアメリカンと言われる開拓建築で、北海道・東京をはじめ、日本全国に広がります。

——現在の中華街の、中華料理を



ブリッジンス設計の横浜税関(のち県庁)

食べさせるところというイメージが出来てくるのは明治中期から終わり頃で、三把刀と言う言葉で知られる技術職、すなわち裁縫・理髪・料理が主体で他に大工とか塗装職人がいました。

——そう、中国の建築技術者はかなりの数がいます。カーペンター、ビルダーを職業としている人を人名録から拾いだすと継続的にかなりの人がいます。それらの人が居留地の建築家を施工面で支えたのでしょう。

藤森 職人町ということですね。有名で、震災後まで余命を保つたので名前が遺っていますがどうい

うものが作られたかはほとんどわかつていません。ただ最近当時のカタログが一点出てきました。それが家具というものは流通品として、しょっちゅうオークションをやつていて残りません。

話は変わりますが、横浜は一九二三年(大正十二)に関東大震災があつて壊滅的被害を受けたことはよく知られています。ですから現在、横浜の建物を見てみると、明治、大正期の建物が欠落している、これは中国とも日本のほかの都市とも違う点だといえます。

ただ、建物の交替期というのを考えてみると、ちょうど震災の頃に当たつていたのではないかと思うのです。というのは、上海のバンドの建築は大体一九二〇～三〇年代に集中的に建て替わっているといつた感じをうけ、それからいうと、横浜と時期的に共通しているのではないかと思うのですが。

藤森 一番古い上海の建築というのはアールデコの時代だから一九三〇年代です。それからざく初期の姿を残しているのに烟台夢露亭と

「日本の開国と海外情報」展余話

『香港船頭貨価紙』

前回の展示では、竹川欽也氏のご好意により、伊勢商人・竹川竹斎の射和文庫資料を多数展示することができ、本誌でも竹斎の情報収集の一端を紹介した。

開国前の竹斎の海外への関心は

もっぱら「海防」をめぐるものであり、いかにして「蛮夷」から国を護るかが主眼であった。しかし、開港とともに、竹斎は一転して貿易に目を向け始める。たとえば、江戸在住の実弟・竹口信義を通じて、地元射和（松阪市射和町）の茶の輸出に乗り出すのである。

そのころになると、竹斎の情報源のなかに、日本でも刊行され始めた新聞が新たに登場してくる。

同紙は、イギリス人 W.J. Murrow

が中心となって香港で発行した英字紙 Daily Press の中国語版である。そしてこの中国語の新聞が日本に



『香港船頭貨價紙』（竹川欽也氏蔵）

もたらされ翻刻されたのが「官板香港新聞」（いわゆる官板華字新聞のひとつ）である。のちには日本語で訳された『香港新聞紙』の名で発行された。

幕末に幕府が最初に発行した新聞（官板新聞）が、中国語新聞とバタビアのオランダ語新聞の翻刻や和訳であり、宗教記事や具体的な貿易記事を削除した抜粋である。

竹斎が入手した新聞はほとんど残されていない。しかし「反古帖」のひとつに、きわめて珍しい新聞の原紙が見つかった。壬戌年八月初四日（一八六二年八月二八日）付の『香港船頭貨價紙』七五六号である。

同紙は、イギリス人 W.J. Murrow

が中心となって香港で発行した英字紙 Daily Press の中国語版である。（同紙や他の華字紙についての現存は、アメリカの Essex Institute に一八五九年発行の七八部が確認されているだけである。（同紙や他の華字紙についての現存は、卓南生氏の『新聞学評論』三五号掲載論文、「日本初期新聞全集」解題に詳しい）

竹斎旧蔵の本号についても、今回華字版が見つかっただけで、英字紙・華字版・翻刻版の三種の同一号は揃わないのである。この香港にも残っていない新聞が、開港地からはるか離れた射和の商人の手元に保存されていた。幕末の新聞の読者については、当然のことながら手掛かりは少ない。今回の例は大変貴重な発見といえる。

竹斎がどのようなルートで本紙

を手に入れたかは特定できない。

本紙が貼付された「反古帖」が、「文久三年癸亥年夏より三卷目」と題したものであることからいえば、文久二、三年の線が強い。

竹口義信は、文久元年（一八六

一）に横浜に赴き、宣教師ヘボンの紹介で英二三番ロスと知り合つて茶の輸出に乗り出し、竹斎は伊勢で茶の仕入れを開始している。この新聞のそばに英三番の紙札（商標のように印刷したもの）も貼ってあるところからみると、竹口が横浜で入手し、竹斎に送つたと考えるのが妥当であろう。竹斎の文久三年（一八六三）二月の日記には「竹口より送越候新聞紙、あと分島羽様へ差上げる」との記事もみえ（山崎宇治彦他編「射和文化史」より）、竹口がしばしば新聞を送っていたことは明らかである。

この華字紙でとくに興味深いのは、明治二年に横浜で創刊された日本最初の日刊新聞『横浜毎日新聞』と酷似していることである。

まず、両紙とも、それまでの冊子形態のものではなく、現在と同じ新聞形式になった最初の華字紙、邦字紙であることがあげられる。また紙面の構成もよく似ている。

第二に、商船の出入港、貿易記事、広告などを主体とした商人向けの経済新聞であることである。『横浜毎日新聞』の発案者が、横浜発行の英字紙もさることながら、この華字紙を参考にしたことは十分考えられることがある。

竹斎旧蔵の『香港船頭貨價紙』は「反古帖」に貼りつけてあるため、一面分しか読むことができないが、一枚四面立てか、あるいは一枚四面立てとを考えられる。

まず一面には、香港・マカオ・黄埔で荷を降ろし各港へむかう船の一覧がある。出港先は中国諸港のほか、サンフランシスコ、メルボルン、タイもある。

三面の「新聞」欄では、中国の五港開港以来、それまで唯一の貿易港であった広東の茶貿易の地位が福州や上海に奪われつあることを、出荷量をあげて報道している。別の「新聞」欄では、タイからニューヨークとして米価の高騰を伝え、上海付近の米不足を報じている。また時事についての「新聞」もあり、太平天国の状況を報じてある。茶の貿易、米の問題等、いずれも竹斎の関心事であった。

また、竹口からの新聞記事抜かりなどには、綿に関する記事がとりあげられているが、このことの意味は、松阪が木綿の産地であつたことを思いだせば十分であろう。

竹斎は、貿易に利を求めるというよりは、地元の殖産に役立つ貿易を考えていたといえる。ここに商人としての竹斎の特性と、情報収集の特性があつたといえる。

なお『香港船頭貨價紙』の解説や所在確認等については、伊藤泉美、飯島涉両氏に大変お世話をになつた。

資料よもやまばなし

共同倉庫と小野光景

明治十年代の倉庫事業

●小野光景とは

明治二〇年代の横浜を大きく揺るがした横浜共同物事件。その一つの焦点となつたのが、小野光景が主導した横浜貿易商組合の共同倉庫建設事業であつた。この小稿では、その前史としての一〇年代の小野の事業を紹介する。あらかじめ、彼の略歴を述べておこう。

小野光景。弘化二(一八四五)年、信州伊那郡小野村生。明治四(一八七一)年頃、横浜に出て、横浜の町名主などをつとめた父兵助の仕事を継ぎ、関内の小区戸長・大区区会議長など歴任。一〇年代前半には、横浜商法学校の創設、横浜商法会議所の創立を主導。また、一三年の横浜正金銀行創立に際して取締役兼支配人となり、一五年には頭取にまでなるが、同行改革にからんで同年一二月辞職。一六年六月、外村両平の店を継ぎ売込業を開業し、以降、五大売込商の一として、横浜政財界のリーダーとして活躍。大正八(一九一九年)年、歿。

彼の履歴の最大の特徴は、明治



小野光景

●横浜倉庫会社

二四年七月の『横浜貿易新聞』の連載記事(七・二三、一五、二六、二八)「共同倉庫設立趣意書」で、彼は次のように語る。

そもそも余が本組合〔=横浜の事業〕を始めたのは、當時の倉庫事業の状況より倉庫事業の必要を感じたのも、本港においては税関において官業としてこれに従事するもの〔が〕ただ一あるにとどまりて、いまだ民業としてこの必要を十分に充たすにたるものなきより、ここに会社を設立し、欧米の制限にない貸倉制を創始し、もつてこの必要を充たさんと欲して、このこれを小模形となし、もって実際の運用を試み、広く世人にその効用を表示し他日に標準たらしむるにあり。

…時これを小模形となし、貨物主は「自家に築造すべきの倉庫費を省」いたり、「僅々の見本をもつて売買をなし得る」など利益があること、を宣伝した。しかし、開業後の経営は順調ではなかつた。日本商人の利用は少なく、「会社の本意」ではない外国商人への「戸前貸」(倉庫そのものを分割して貸すこと)を行わざるを得なかつた。

●荷預所事件と小野光景

このようだ時、連合生糸荷預所事件がおこり、これにこの会社と小野光景は深く関わっていく。一四年九月、横浜の大生糸荷預所は、外国商人の不當な取引方法・買い叩きを「掃除すること」を理由に、国内荷主・商人の大半の支持を得

一〇年代半ばに実業人に転身したことであった。売込業経営に先立ち、彼は一三年一月に開業した横

浜正金銀行の経営に参画したが、この年一月にはまた、あまり知られていない別の経済事業を始めていた。横浜倉庫会社である。

貿易商組合のために共同倉庫設立の計画をなし、これを実施に試みたるは明治十三年ににして、同年十一月、余が本港の有志諸君と共に設立した横浜倉庫会社に基づくものなり。而して、同会社設立の趣旨たる〔は〕、當時内外貿易

上の状況より倉庫事業の必要を感じたるも、本港においては税関において官業としてこれに従事するもの〔が〕ただ一あるにとどまりて、いまだ民業としてこの必要を十分に充たすにたるものなきより、ここに会社を設立し、欧米の制限にない貸倉制を創始し、もつてこの必要を充たさんと欲して、このこれを小模形となし、もつて実際の運用を試み、広く世人にその効用を表示し他日に標準たらしむるにあり。

野の言を引用しよう。

余は、この時〔横浜〕正金銀行副頭取の任に在りて該荷預所の設立に対しては一切関係

なりし……も、坐して視るに忍びず、よつて一日「ある日」引取商中のおも立ちたる

数氏すなわち堀越茂三郎、木村利右衛門、中村總兵衛の三君と会合し、ためにこれを調停せられることを勧誘せしに、

三君たちにこれを承諾し、まず荷預所の役員諸君に就きその意見を申されしに、役員諸君も皆異議なくその調停を依頼せられたり。

堀越らはただちに外国商人と交渉したが、両者の主張は対立して

「さらに数週日を経過したため、小野は、「我生糸商人の権利を保全

し併せて生糸の販路を開く」ような方法を案出し、それを「引取商諸氏に謀り」実行に移した。具体的には、税関構内の空地を借り受け、そこに生糸の「公売所」を急造し、一月九日から十日間の予定で、外国商人への生糸の公売を試みたのであつた。しかし、外国商人はこれに応ぜず、また日本側の生糸荷主の同盟違背、「抜け売り」が行われそうになつた。そこで日本側は、引取商らも調停に応じない外国商人とは輸入品の取引きをしない、ということにして、ふたたび調停を急いだ。

結局、一月一六日に外国商人と日本商人との和解が実現した。和解に際しての取り決めは、「日本商人は便利なる場所において共同倉庫一ヶ所を便利に建築し、その規則章程及び用意を整ふるなどの事を日本売込商人と外国買入商人との間に協議を遂げ、賣買人双方の権利を保全し相互に満足するを得て(て)而して生糸元込上一般の方法を改良するにおいてはこれを承諾すべし」というものであつた。つまり、将来共同倉庫を設立するという点で、日本側は面子をかろうじて保つたものの、その取引方法の決定には外國商人の承諾が必要であるとして、外国側は実を取つたのであつた。

小野の言によれば、かれの事件への関与は二点あることになる。第一は、かれが日本側の調停行動を先導したこと、第二は、事件打

県庁跡地購入問題

〔横浜市史稿〕の「小野光景君伝」(政治編三、三五四頁)は、「彼は銀行其他の関係から、これが調停の任にあたり、荷預所を解散し、共同倉庫を建設することとし、十一月、平和に局を結ぶに至った。當時内外商人等しきこれを徳とした」と述べ、かれの功績を高く評価している。

ところで、この事件中の貿易取引の停滞によって、「この間倉庫会社の事業はこれがために妨げられました」といふに微々たるものとなり、「十六年五月に至るまで同会社の事業も「やや隆盛の運に向ひたり」という程度であった。しかし、いっぽうで小野は倉庫事業の拡張を図っていた。

かれは、「明治十四年夏、本県東条を他所に移転せらるるの内儀あるを聞」き、「この県庁跡地を敷地にして倉庫を建設しようと考へ、當時の県令野村靖から、その「下付」について尽力するとの言質を取つた。この県庁移転計画はいつたん中止となるが、翌一五年一二月の火事で県庁は全焼したので、かれの計画は再度浮上した。

かれは、「売込引取商人において県庁よりその敷地の払下を受け、県庁はその払下代金をもつて税闘の家屋と買受け、これに移転し、税闘はその売渡代金をもつて波止

●共同倉庫その後

の設立を提案したこと、である。

〔横浜市史稿〕の「小野光景君小伝」(政治編二、三五四頁)は、「彼は銀行其他の関係から、これが調停の任にあたり、荷預所を解散し、共同倉庫を建設することとし、十月、平和に局を結ぶに至った。當時内外商人等しくこれを徳としていた」と述べ、かれの功績を高く評価している。

●共同倉庫その後
以上は「共同倉庫設立趣意書」による説明である。この資料が生まれた背景を説明するには、その後の展開を追う必要がある。

小野は、二〇〇年一二月に、横浜貿易商を集め、築港・共同倉庫・

物事件の前半)

月まで全体会議（『貿易品別各組合の総代による連合会議』）を開けなかつた。それが調停された後には、市制施行をきつかけとする貿易商勢力（商人派と、「共有物の市有化を主張する非貿易商勢力）地主派の大紛争が起りこゝ、市会議事まで発展して（『黄兵士事件』

展
月

部派＝改革派の激甚な対立が、また横浜を搔るがしたのであった（『五年九月に組合総理を辞任し、結局、小野の事業構想は十分に生かされることはなかつた、と言える』）。

地主派との対立が收められ、留易商の連合組織である横浜貿易商組合ができ、この組合によってようやく共同倉庫の建設が実現する。小野は組合總理となつて、これを主導したのであつた。共同倉庫の建設は、一二三年一二月に着工し、二四年一〇月に竣工した。その途中、倉庫の運営方法が議論されてゐる最中に、組合の機關紙的存在である「横浜貿易新聞」に連載されたのが、この「共同倉庫設立趣意書」である。彼はこの一文で、彼の事業を回顧しつゝ、近代的倉庫業への意欲を述べ、また埠頭敷地購入問題の弁明を行つたのである。

ともあれ、小野・原・茂木が参加した横浜倉庫会社、直輸出政策を担つた横浜正金銀行における小野の地位、荷預所事件收拾への小野の行動、小野が率いる横浜貿易商組合の事業、と並べてみると、一〇年代・二〇年代を通じた小野の「公共的組織的貿易形態」とでも言ふべき構想が脈々と流れているのを感じる。

明治二〇年代の横浜にとっての小野光景の重要性は既に確定している。しかしそればかりでなく、荷預所計画の立案など、一〇年代の彼の果たした役割にも大きいものがあつたのではないだろうか。

(本誌第三五号の堀勇良「沖守固の三大事業」参照)。貿易商らはこれに賛同し、話はいつたん具体化し始めた。しかし、前途は多難になりました。二年一月、事業計画が協議されるうちに、県土跡地購入が一般の貿易商の承認を経ずになされたことが問題となり、これをきっかけに大貿易商と中小貿易の対立が激化して、彼らは二年六月まで全体会議(『貿易品別各組合の総代人による連合会議』)を開けなかった。それが調停された後には、市制施行をきっかけとする貿易商勢力―商人派と、「共有物の市有化を主張する非貿易商勢力―地主派の大紛争が起り、市会解散にまで発展した(『横浜共有一物事件の前半』)。

ともあれ、小野・原・茂木が参加した横浜倉庫会社、直輸出政策を担つた横浜正金銀行における小野の地位、荷預所事件收拾への小野の行動、小野が率いる横浜貿易商組合の事業、と並べてみると、一〇年代・二〇年代を通じた小野の「公共的組織的貿易形態」とでも言ふべき構想が脈々と流れているのを感じる。

明治二〇年代の横浜にとつての小野光景の重要性は既に確定している。しかしそればかりでなく、荷預所計画の立案など、一〇年代の彼の果たした役割にも大きいものがあつたのではないだろうか。

横浜新風土記稿

(7)

横浜の牧場

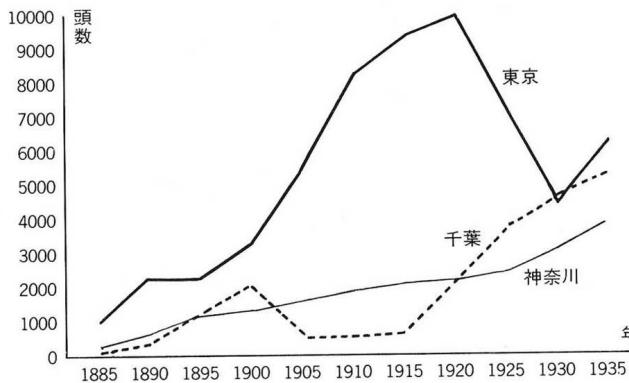
酪農県神奈川

根岸や本牧の丘のあちこちに牧場があつたのは、それほど昔のことではない。『牛乳の流通機構に関する調査』(神奈川県、昭和二年)によると、昭和二年現在、神奈川は牛乳生産量では北海道に次いで二位、乳牛頭数では北海道、長野に次いで三位であった。

統計的の残されている明治一七年以降の乳牛頭数をみると、東京が圧倒的に多く、二〇年代までは神奈川、兵庫、長崎がこれに次いでいる。この三県には開港場があり、居留外国人や寄港船舶の需要が多かつたからであろう。その後、大阪、京都、愛知など大都市を抱える府県、乳製品の生産地である千葉、北海道などが第二グループを形成するようになるが、神奈川は一貫してそのなかに含まれている。

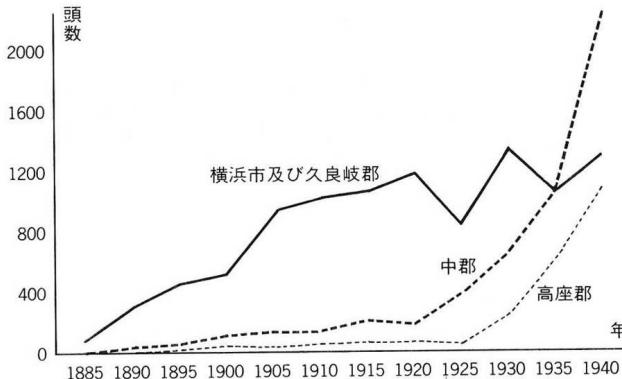
表①は首都圏の三府県について、乳牛頭数の推移をまとめたものである。一九二〇年(大正九年)頃を境に東京が急激に減少、千葉が急激に増大している。都市部の搾取される農乳の比率が高まつて、農家が副業として飼養する乳牛か

表①首都圏3府県の乳牛頭数の推移



(典拠)『農務統計表』及び『日本帝国統計年鑑』による。

表②神奈川県内3地域の乳牛頭数の推移



(典拠)『神奈川県統計書』による。

(注)①横浜の牛乳園を構成するのは久良岐郡の根岸村・本牧村・中村・戸太村(戸部と太田)であり、これらは1896年横浜市に編入される。そこで表には横浜市(1888年以前は横浜区)と久良岐郡を合算した数値を用いた。

②「中郡」の1885-1895年の数値は大住郡と淘綾郡の合計。両郡が合併して中郡が成立するのは1896年である。

(二六%)、三位千葉(一一%)となり、東京やとくに千葉の場合は加工原料乳の占める割合の大きかったことがわかる。人造バターは神奈川が一位で、全国の九七%と独占的な地位を占めている。けれども、そのために使用された牛乳の量はわずかである。したがって、神奈川の場合、ほとんどすべてが飲用乳と考えられる。

表①でみると、神奈川は一貫して漸増傾向にあるが、内実は大きく変化している。表②は県内の三地域について乳牛頭数の推移をみたものである。やはり一九二〇年頃を境として、横浜市が停滞傾向を示す一方、中・高座両郡が急速に増加している。市乳から農乳への重心の移動は神奈川でも起きていたのである。そして県内の牛乳のかなりの量が東京に移出されるようになる。

居留外国人による牧場の創始

横浜で最初に牧場を開いたのは、アメリカ人リズレーである。慶応二年春のことであった。ジェイムズ商会の牧場がこれに続く。場所は根岸の丘の上にあり、クリフ牧場と称していた。一三年にはウインスタンレーも根岸に牧場を開設

日本人の創始者たち

日本人の牧場創始者としては、前田留吉、中川嘉兵衛、下岡蓮杖といった人たちの名が伝わるが、いずれもお伽話のような伝承が残されているだけで、確かなことはなにもわからない。

『神奈川県史料』によると、明治七年四月、三浦郡秋谷村の若命はさだかでないが、明治七年頃に内訳は三浦郡八、鎌倉郡三、都筑郡・高座郡・不明各一。のちの三浦郡長小川茂周、鎌倉ハムの創始者となる鎌倉郡下柏尾村の斎藤万平等が含まれていることからみて、いずれも土地の名望家であろう。

設立目的は、和牛と洋牛を交尾させ、県下農家に預けて繁殖させることがだったが、「乳汁ヲ販売スル事」も含まれていた。政府の勧業政策に依存した他の半官半民の会社と同様、政府の政策が変化するとともに衰微したと考えられるが、農家の提携による繁殖と搾乳の結合という日本独特の経営スタイルを生み出した点で、先駆的な役割を果たしたといえよう。

表③は横浜の牧場に関する統計として最も古いものである。B.C.は専業者、E.H.は農家の副業に近いものと思われる。

表③明治18年の久良岐郡内の牧場

	搾乳場	乳牛(頭)	搾乳高(石)(合)	備考
A 戸部町	129番地	12	53,600	
B 北方村	606番地	30	132,228	中沢源藏 H. Yagi
C 同村	635番地	30	216,000	
D 根岸村	3570番地	8	74,736	石川要之助
E 同村	3871番地	2	19,298	
F 同村	2200番地	1	3,256	新井権三郎
G 同村	2057番地	1	3,308	
H 本牧本郷村	3966番地	2	13,430	

(典拠)『神奈川県統計書(明治18年)』による。

(注)備考欄は、各種資料から經營者名を推定したもの。

明治三四四年から三八年にかけての横浜市内の牛乳消費量は、年平均四七〇七石であった。横浜市への牛乳の供給は概ね市内牛乳搾取所よりし一部は久良岐、都筑、橋樹の数郡より補給せらる。而して最も多く費消するは関内及山の手となし、伊勢佐木、野毛町、元町、神奈川の方面之れに次ぐ」と報告されている(『神奈川県農会報』二九号)。同じ時期の横浜の現住戸数は居留外国人を含めて約六万三千二百戸、一戸当たりの消費量は年間七升四合五勺、一日わずか二勺である。牛乳飲用の習慣は、なお一部の人たちのものだったにちがいない。搾乳高は四二八九石であつたから、明治時代の横浜は、牛乳に関してはほぼ自給自足の状態にあつた。三三年に石川牧場が発行した値上げ通知書をみると、値段は一ペイント七銭、一合に換算すると約二・二銭となる。必ずしも高価なものではなかつた。

供給の主体は搾乳專業者だつたのは「荒井権三郎外五人」であつた。Fの新井権三郎は、その「荒井権三郎」に他ならないであろう。當業願には「乳牛五頭」と記され、丘の上の所有地を手離したのち、一八年一一月、丘の下の他人の土地を借りて牧場を開いたのである。當業願には「乳牛五頭」と記され、

「ジャパン・ディレクトリー」の広告によると明治五年の創業、下岡蓮杖が戸部に設けた牧場の牧夫だったという伝承もある。九年には横須賀に牧場を所有しており、同年牛疫で死亡した牛に対して横浜牧畜会社から給与が提供されているので、両者にはなんらかの關係があつたのかもしれない。

『日本外交文書』によると、根岸のクリフ牧場に土地を提供したのは「荒井権三郎外五人」であつた。Fの新井権三郎は、その「荒井権三郎」に他ならないであろう。当業願には「乳牛五頭」と記され、

ている(『市史稿写本』「根岸村森氏記録文書」による)。

横浜の牛乳園 (Milk Ring)

と太田の丘陵地帯、波止場を中心として二~四キロ・メートルの範囲に収まる。これが横浜の牛乳園(Milk Ring)である。

横浜の牛乳園の担い手たちの出自はさまざまである。本牧間門の渋谷半次郎のような豪農經營のタイプに属するものや、アメリカで修業を積んだ大沢延太郎のような異色のエキスパートもいる。しかし数のうえから言うと、既存の牧場で牧夫や配達夫として働きながら知識や技術を得て、資金を貯えて独立した苦労人が多いよう

みうけられる。中川嘉兵衛のパートナーと伝えられる菅生健次郎の牧場の配達夫だったという青木重三郎、同じく配達夫出身の馬淵市太郎、ワインスタンレーの牧場を継承した岸茂八などである。こうした人びとの伝習の始源に位置するが、幕末・明治初期に外国人によつて開設された牧場であつたろう。

石川牧場の経営

ニコラ・モルギンと言えば、居留地消防隊の隊長として、明治期の横浜では名高い人物であった。そのモルギンが、来日直後、牧場の経営に従事していたことはこれまで知られていないかった。「ジャパン・ディレクトリー」には明治七年版にクリフ牧場の支配人として、中村三となる。これを地図に落としてみると、都心を取り巻く根岸二

三、本牧一二、北方六、南太田四、中村三となる。これで地図に落とすと、石川牧場と呼ぶことにする。

●組織 明治三八年の策定になる「石川搾乳所雇人取締心得書」という全八か条の就業規則がある。これをみると、経営陣は店主要之助の他に、「當業一般ノ取締役兼監



石川要之助 石川要之助

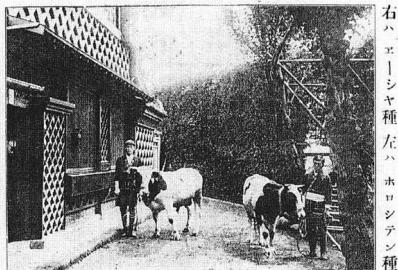
理人」石川以作(要之助の婿)、「雇人取締役兼監督人」木内千代作、「牛舎取締役牧夫長」岡本桂二郎の四名で構成され、そのもとに搾取人・冷却処理を担当する牛乳取扱人・瓶詰作業を行なう牛乳取扱人・配達人といつた職掌の雇人が置かれていた。雇期限は一か年、月給の三分の一は主人が預り、年一割五分の利子を付けて返すことになつて、これが銀行の利子の三倍にあたるという。「品行方正」に一か年勤めると、正月に賞与金が与えられるとともに、昇給する定めであった。

●賞与金の額は経営者四名で構成される委員会で決定され、甲第一級百円から等外第三級三円まで一二等級に分かれていた(三九年一二月の「石川搾乳所雇人獎励書細則」による)。かなり厳しい経営方針だが、このような環境のなかから、やがて牧場主として独立していき人材が育つたのである。立花牧場の創設者、立花忠吉はその一例である。

三九年未現在の雇人は一〇名。出身地はやはり神奈川が四名と多いが、内訳は久良岐・都筑・高座・足柄下の各郡にわたつてゐる。他是東京・茨城・山梨・滋賀・石川・福岡とさまざまである(「石川搾乳所雇人名」による)。

●乳牛 飼養乳牛については、やはり三九年の「交尾控薄」によつて知ることができる。種牛は太平

石川搾乳店



石川牧場発行の絵葉書 明治末頃。石川要蔵氏蔵

洋、第二太平洋、下総の三頭。このうち第二太平洋は、二七年の日本畜産協会第一回畜産品評会で二等賞を獲得している。賞状によると「アーシア種一回雑種」であった。石川牧場の屋台骨を支える種牛だったのであろう。

判明する限りでは、牝牛は自己所有が一三頭、預り牛が一八頭、計三一頭いた。貸主は一人、それぞれ一、二三頭ずつである。千葉県安房郡の人が最も多く五人、牛は計七頭、神奈川県中郡が二人、牛は四頭であった。期限は一腹の場合と半年の場合があり、借料に相当する「乳代金」は四〇〜八〇円くらいであった。子牛は牡の場合と半年の場合があり、借り取られたようである(明治四〇〜四一年の「乳代金払込期限及金高其他必要点控帳支払契約一覧表」による)。

表④石川牧場の中元配達先(明治39年)

配達車	外国人	日本人	合計	備考
第1号	32	2	34	山手(地蔵坂以東)方面 山手病院、英國病院、独逸病院等
第2号	17	12	29	山元町・山下町方面 グランド・ホテル、クラブ・ホテル等
第3号	0	15	15	中村町・長者町方面 神風樓等
第4号	11	27	38	山手(地蔵坂以西)・石川町方面 ベルビューハウス、ボーマー商会等
第5号	0	36	36	山下町を除く関内方面 サムライ商会、得田・矢崎各医師等
第6号	0	18	18	野毛町・高島町・神奈川方面 十全病院等
合計	60	110	170	

(典拠)「中元歳暮控」(石川要蔵氏所蔵)による。

表⑤石川牧場の一日平均出荷量(大正13年)

月	4合(本)	2合(本)	1合(本)	5勺(本)	小計(合)	残(合)	合計(合)
3月	3.2	17.5	135.1	45.3	205.9	9.3	215.3
4月	5.2	18.0	144.6	56.3	229.7	10.0	239.7
5月	1.3	13.3	163.1	67.2	228.9	7.5	236.4
6月	0.8	11.8	172.3	65.0	231.7	9.0	240.8
7月	1.0	11.4	185.4	78.4	251.5	4.4	255.9
8月	1.0	9.8	176.7	77.1	239.1	6.1	245.3
平均	2.1	13.6	162.7	64.8	231.0	7.8	238.8

(典拠)「配達帳簿」(石川要蔵氏所蔵)による。

●その後――要之助は明治四一年に死去し、二女のフミと婿の以作が跡を継いだ。四四年、根岸町一六六七番地に移転する。現牧場主の要蔵氏は四代目にあたり、創業以来今年で百四年になる。しかし、来年六〇歳を迎えるのを機に、廃業を決意されたという。明治時代の横浜の牛乳園を担つた搾乳専業者の伝統も、やがて終焉の時を迎えるとしている。

本稿の執筆にあたっては、石川要蔵氏より貴重な資料をご提供いただきました。記して感謝の意を表します。

(斎藤多喜夫)

業者が、農村部で飼養される乳牛の品種改良に果たした役割についても顧みる必要があるのではない。このことはまた、結果的には、農乳の進出を促す一因にもなったものと思われる。

●顧客――表④は、明治三六年から四一年にかけての「中元歳暮控」によつて、三九年の中元の配達先をまとめたものである。配達車と荷車のこと、牛乳の配達の際と同じコースで届けられたものと思われる。配達先のすべてが顧客とは限らないが、およその傾向はつかめるであろう。

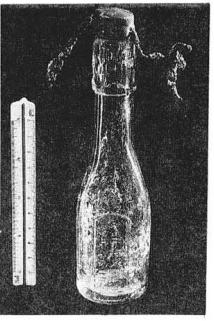
石川牧場の第三号配達車 大正一〇年頃、真金町遊廓大門前での撮影。石川要蔵氏蔵 配達先は都心の閑内や旧居留地の山下町・山手町に集中している。外国人が全体の三五%を占めていること、ホテルや病院が多いことも注目される。こうした顧客の傾向から、石川牧場の經營は、濃厚乳等高品質の牛乳の供給によって



●出荷量――先の就業規則第三条によると、配達人は瓶詰後の牛乳を取扱人から「配達帳簿ニ記載ノ瓶数ト引合セ受取ル」べきこととされてゐた。時代は下るが、大正一三年三月から八月にかけて、毎日朝夕二度記録された配達帳簿と思われる資料が残されている。表⑤はそれを集計したものである。配達車一台分の数量と考えられるので、牧場全体としてはこの五~六倍の出荷量があつたものと推定される。五倍として年間約四百石となる。残乳は三%程度であり、きわめて能率が高い。瓶は四合・二合・一合・五勺の四種類があり、

山手八〇番館遺跡出土。大正二年九月一日、関東大震災当日の朝、元町の渡辺牛乳店から配達されたものと思われる。当館蔵

月を追うごとに前者が減少、後二者が増大している。関東大震災復しつつあることを示すものであろう。



横浜人物小説

20

『イリュストラシオン』紙の日本特派員

J.-C. バレ

一八四三年にパリで創刊され、以後約一世紀にわたって刊行された世界的に著名な週刊紙入り新聞『イリュストラシオン』は、その時代時代の日本について、興味ある記事を載せている(同紙の日本関係記事集を昭和六一年より当館から刊行中)。初期には、ヨーロッパ人にとって物珍しかった日本の風俗の紹介記事と、幕末・明治初期の日本国内の諸事件を報道した記事が目立つが、しだいに日本の社会状況や文化を取り上げて、日本を深く理解しようとする記事にかわってくる。これは初期の記事の送り手が、軍人や船員、旅行者といったいわゆる素人だったのから、日本に駐在し、日本の言葉や習慣、さらには文化を通じた本当の意味での特派員が登場はじめたことによると思われる。

その初期の特派員の一人が今回取り上げたバレ(J.-C. Bale)である。初登場は一九〇二年五月号であると思われる(署名入りの記事の最初の号がこの号であるが、それまでに無署名で寄稿していた可能性もある)。なお、初期の記事に

は、本名ではなくテブラ(J. Tébala)という名前を使っている(本名のスペルを入れ替えた一種の言葉遊び)。初登場から四年後の一九〇五年までに一七編の記事を『イリュストラシオン』に寄せている(以

後も一九三一年まで、四四編の記事を同紙に寄せている)。

この時期は日露戦争が勃発し、『イリュストラシオン』にも毎号のごとく戦報が載り、優勢が伝えられるアジアの黄色人種の国、日本への関心は世界的に否が応もなく高まる時期にある。このような情勢を考えると、四年間で一七編という数字は多くない。しかし、バレの記事はどれも日本社会を深く扱った評論風記事ばかりで、戦況記事などとは較べものにならないほど内容のあるものである。例えば一九〇二年の初登場の記事は、「日本の議会制度と選挙風景」と題された四ページにわたるものであるが、この中で制限選挙・政府の選挙干渉・士官の存在などを問題としてあげ、さらには議会制度の発達は天皇の存在によって妨げられているとまで述べている。

別の号では、日本国内の新聞・雑誌発行状況にふれ、各新聞・雑誌の政治的立場まで詳細に解説している。そして日本は開国以来、西洋から様々な事柄を攝取してきたが、新聞事業に関しては外国人の手を借りずに日本人が独自に確立した分野であり、政治体制や行政制度の改革、軍隊の洋式化といった上層部のみの改革ではなく、一般大衆にまで浸透した変革であると、高い評価を与えている。

●バレとビリー

このような取材姿勢は戦争を扱った記事を書いても、他の記者の書くものとは一味違つたものとしている。例えば一九〇四年六月一日号に掲載された「日本からの手紙」と題する記事の中で、戦時下の日本の民衆生活が増税や物価高く高まる時期にあることをバレは伝えている。また他の号では、戦勝祝いのお祭り騒ぎの一方で、戦死者の葬儀や傷病兵の帰還姿が見られる東京の街の風景や、松山の軍事病院で治療を受けるロシア兵捕虜の生活を紹介している。従軍記者として戦地にも赴いているが、彼の署名入り戦況記事はみあたらぬ。このような取材姿勢をみると、バレの記事のさし絵として、同じフランス人の風刺画家、ピゴーの絵が多く使われているのも理解できる。とともに日本社会をみる視点は、大衆の目の高さにあつた。

ただ、日本の近代化をどう評価す

るかという点では違つていて。ビゴーは上からの押しつけでおこなわれた西洋の猿まね的でしかない近代化として非難したが、バレは、問題はあるとしながらも、旧の日本がうまく共存し、なによりも日清・日露戦争の戦勝国となりえた日本の発展を支えたもので、あると評価している。バレの日本に関する一連の記事は、日露戦争時にロシア側に立っていたフランスの読者にどのように受け取られたのであろうか。

●バレと横浜

以上のようなバレの記事は、その長い日経験に裏付けられている。後年、著書の中で、バレは五ないし六回、通算一六年間近く日本に住んだことがあると述べている。最後の在日時には関東大震災(一九二三年)に遭つたとあるので、『イリュストラシオン』への登場が一九〇二年頃であること、また日清戦争時の日本関係記事の送り手は別の特派員であることを考えあわせると、初来日は一八九〇年代後半であろうか。

日本他にも清国・インドシナ・ロシアにも長期滞在したことがあるが、この中で制限選挙・政局問題としてあげ、さらには議会制度の発達は天皇の存在によって妨げられているとまで述べている。

●バレと横浜

バレの日本での足跡を当時の外国人名録(*The Japan Directory*)で追つてみたが、在住が確認できるのは一九〇四~〇五年と、一九〇九~一〇年の二回の期間のみであった。後年、著書の中で、バレは五手四八番に、夫人とジャンヌという名の娘(と思われる)と住んでいる。しかし翌〇五年には東京の築地のホテルにバレの名前があるだけであった。家族をフランスへ帰し、取材活動にとつて便利な東京のホテルで単身赴任生活をはじめたというわけであろうか。それから四年間バレの名前は人名録から消える。そして一九〇九~一〇年に、再び横浜の山手二二一-B番にバレとその夫人の名前を見ることができた。あって横浜を選んだのであるか。彼の横浜での活動はわからない。

Langue parlée)という語学書を

りで刊行しており、一九三一年の時点で四版を重ねている。英語版・ロシア語版も出版されており、好評であつたようである。他に同じくパリで、極東問題を論じた『日本は何を望んでいるか、中国は何を望んでいるか』(*Que veut le Japon, Que veut la Chine?*) (一九三一年刊)や、『軍國日本』(*Le Japon Militaire*)という本も出版している。後者は英語版が横浜で出されている。刊年は一九三一年以前というのは確かだが、はつきりとはわからぬ。

閲覧室

から

比較的古いものもふくめて、紹介したいと思います。

〔鶴見区〕

○郷土読み本鶴見歴史散歩(鶴見区)

区制三十周年祝典委員会 昭和三

二年一〇月 B6判 七六頁

区制以前の沿革、鶴見名所の他

一〇の地域に分けて地名考、史蹟、名物、行事、口碑伝説、人物、詩歌などを紹介したもの。

○鶴見区史(鶴見区史発行委員会

昭和五七年三月 A5判 七七〇

区制施行五〇周年を記念して出

版された。第一編鶴見のあゆみ、

第二編民俗、鶴見区近現代年表で構成。

〔神奈川区〕

○神奈川区誌 横浜市神奈川区役所 昭和二二年一〇月 A5判

二三二頁

区制施行一〇周年を迎えて出版さ

れた。第一章沿革概要、第二章行

事、第三章社寺、第四章教育、

第五章社会教育、第六章社会事業、

第七章産業、第八章交通運輸、第

九章史蹟名勝及雑件で構成。

○神奈川区誌(神奈川区誌編さん

刊行実行委員会 昭和五二年一〇

月 A5判 六二八、五九頁

区制施行五〇周年を記念して出

版された。第一編神奈川のあゆみ、

第二編神奈川のあれこれ(社寺、

金石碑一覧、民俗、文芸など)、第

三編現況論から成る。

〔保土ヶ谷区〕

○保土ヶ谷区郷土史 上・下巻(保

土ヶ谷区郷土史刊行委員部 昭和

一三年三月 A5判 二〇一六頁

第一部考古篇、第二部歴史篇、

第三部現代篇、第四部特殊篇(聖

蹟、神社、仏寺、学校、伝説口碑、

紀行詩歌、俚謡俗歌、植物、年中行事、名所、人物)、第五部年表に

より構成。資料が豊富に掲載され

ている。

○保土ヶ谷ものがたり(保土ヶ谷

区制五十周年記念事業実行委員会

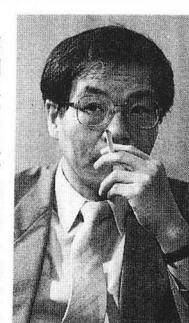
昭和五二年六月 A5判 二七九

頁)

○保土ヶ谷ものがたり(保土ヶ谷

区制五十周年記念事業実行委員会

昭和五二年六月 A5判 二七九



計報

企画調査室長阿部征寛が五月二十五日、悪性リンパ腫のため、東京都文京区の東京医科歯科大学医学部付属病院で死去いたしました。四十六歳でした。

図書整理のため、閲覧室を休みます。(展示室は開いています。)

(1) 各月末(9月を除く)

(2) 1月30日(火)~2月2日(金)

(3) 6月27日(火)~6月30日(金)

当館中庭の「玉楠」の木が昨年

十一月、横浜市地域文化財(地域

史跡)として登録されました。日

米和親条約は、安政元年この「玉

楠」の木のすぐ近くで調印されま

した。現在のものは、関東大震災で幹を焼失したあと、新たに芽吹いた二代目ですが、当館のシンボル

として親しまれています。樹種はクスノキ科のタブノキです。

ミ 情 報
師等詳細未定

▼寄託資料

ミ 情 報

▼閲覧室の休室

▼展示

(1) 「関東大震災前 横浜博覧図

関内の街と建物」 関東大震災前の6/14~9/17 に、本町通りの街並みを復元展示する。

(2) 「横浜の100年」(仮題)
9/20~12月 市制施行以降の横浜100年のあゆみを、市民の生活を中心に行き、各種資料によって再現する。

(3) 「横浜写真の世界」(仮題)
1月~5月 輸出用に製作された横浜写真により、明治中期の横浜の街並みと人々の生活を紹介する。

(4) 講座
歴史講座 「日本の開国と海外情勢」(藤田覚)
5/27 「幕末の海外情報と外交政策」(藤田覚)
6/3 「風説書と新聞」(伊藤久子)
6/10 「佐久間象山の手紙を読む」(井川克彦)
さまざまな側面から明らかにする。
さまざまな側面から明らかにする。
さまざまな側面から明らかにする。
さまざまな側面から明らかにする。

(5) 講座
歴史講座 「日本の開国と海外情勢」(藤田覚)
5/27 「幕末の海外情報と外交政策」(藤田覚)
6/3 「風説書と新聞」(伊藤久子)
6/10 「佐久間象山の手紙を読む」(井川克彦)
背景などを考える。1月開講
講